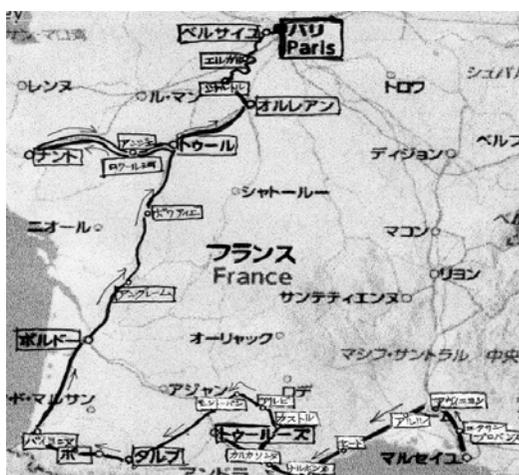




(日本からマルセイユまでの航路)



(マルセイユからパリ迄 自転車の行路)

## ルーヴル美術館への旅

京免 増哉

19歳の頃、僕はフランス革命時代の画家ドラクロワの色彩に魅せられていた。

実物をこの目で見たいと思い、又、画家の道を目指すのか決心する為、ルーヴル美

術館へ行くことにした。

フランスの客船ヴェトナム号が神戸を出港したのが1966年8月20日、翌日の朝、横浜に着いた。マルセイユに向かって日本を離れたのが8月22日。

寄港地は香港、フィリピンのマニラ、タイのバンコック、シンガポール、セイロン(現在のスリランカ)、インドのボンベイ(ムンバイ)、紅海の入り口近くのフランス領ジブチ、エジプトのカイロ、スエズ運河を通り、地中海を航行してマルセイユに入港したのが9月23日の朝であった。

丁度1カ月の船旅である。

寄港地では下船することが出来、街を散策するのも楽しかった。

西に向かって航海する中、アジア人種からインドの人、アラブの人の顔になり、段々と白人の容貌に変わって行くのが興味深かった。又、地球は丸くて大きく、特に引力の不思議さが感じ取れた。

資金に余裕がなく、交通費を節約する為パリには自転車で行く予定にしていた。

パリ市内の交通手段として自転車はあらゆる面で便利だと思ったのである。



(エクスサン・プロヴァンスを走る)

マルセイユからパリまでリヨン経由で北上すれば700km、10日間走ればパリに着くつもりでいた。船内では多くの人と知り合いになることが出来た。フランスの人は

「パリが総てではない、何も見ずにマルセイユから自転車でも10日間掛けてパリに行くのは、あまりにも勿体ないような気がする。」

余計なことかも知れないが、アヴィニヨ

ン、カルカソンヌ、バイヨンヌ、ボルドー、ロワール河の城、ジャンヌダルクのゆかりの地オルレアン、ヴェルサイユ等、それぞれ良い所がありますよ」

と、勧められ、結局2400km、パリまで1日に80km走ったとして1カ月の自転車旅行になってしまった。日本を発つ前に計画していたプランを大幅に変更することとなった。

午前中は美術館、教会などを見て周り、午後から5、6時間自転車走ると予定である。

マルセイユの税関を出て、船で知り合いになった人達に別れを告げ、地図を見ながら自転車に乗ってマルセイユの街中を通り、北の方向にあるエクスサン・プロヴァンスに向かって走り出した。

船内で経験した事などを思い出しながら走っていると、車のクラクションで我に返った。フランスでは車は右側通行なのだ。あれほど前もって調べていたのに。：。これからの長旅が心配になり、注意事項の再確認のため道路の端に自転車を止め、休憩することにした。

自転車の荷台には最小限の衣類、テント、

寝袋、パンクした時の修理道具、一応人前に出ても恥ずかしくない程度の背広上下一式、地図、フランスの案内書、日記などを積んでいた。かさ張って仕方がない背広上下を持って来たのを後悔したが、後にパリの日本大使館へ行った時に役立つ。

よれよれのシャツとジーパン姿で在留届を提出しに行った時、大使館の人が不愉快そうな表情を見せたので、「また来ます」と言って大使館を出た。

次の日は背広を着て白いシャツにネクタイを締め、出直した。職員の方は昨日とは打って変わって丁寧に対応して下さった。やはり、一応の身なりは必要だと思った。少し休んだので、気を引き締め直すことが出来た。セザンヌのアトリエがあるエクスサン・プロヴァンスへ向けて、ペダルを踏んだ。

マルセイユの街から郊外に出るまで道路は舗装されていなくて、古くからのゴツゴツとした石畳である事までは知らなかった。案の定、パンクした。

旧市街を走ったからだだった。

簡単に修理はしたが、先行きの不安が募るばかり。日本を発つ前、1週間ほど試し

に約20kgの荷物を自転車に積み、呉・広島間17kmを何度も往復し、その時にパンクを直す練習等もしていたのだ。

マルセイユの街を出たあたりからエクサン・プロヴァンスの標識を見つけられるようになった。

10km進むのに2時間も掛かっている。

予定どおりパリまで行けるか心配になって来たが、先に進むしかないのだと、自分に言い聞かせ自転車を漕いだ。道中、喉が渴いたので道路沿いにあったポンプで水を汲み、少し錆びで赤く濁っていたが、飲めないことはないだろうと思ひ飲んでみた。やはり、腹を壊してしまった。量が少なかつたせいか大事には至らなかった。またひとつ学んだ。

(直ぐ行動に移さない事)

マルセイユの港から26km走った頃、エクサン・プロヴァンスの街を知らせる表示板を見つけた。

セザンヌの作品で有名な、山肌が薄い赤紫の「サン・ヴィクトワール山」はすぐに見つけることが出来た。

エクサン・プロヴァンスでは船で知り合

いになったセバスチャンさんの親戚の家に泊めて貰うことにしている。信仰心の篤い家族の人達だった。

翌朝、言葉は通じなかったがセザンヌのアトリエの場所、美術館などをいろいろと教えて貰った。

「メルシー・ボークー」としか言えない語学力が情けない。

セザンヌのアトリエの中は彼の傑作の一つである作品「静物」そのままの状態で机の上に配置されていた。馬の頭部の骨、人間の骸骨などもあった。壁にはドラクロアの絵「サルダナパールの死」のエッチングのコピーが掛かっていた。セザンヌがドラクロアの崇拜者だったことは知ってはいる。セザンヌのアトリエの庭のベンチで昨晩お世話になった方から頂いたサンドイッチを食べ、昼過ぎにアヴィニオンに向かってペダルを踏んだ。

南フランスの広々とした田園風景はこの国の豊かさを感じさせた。

途中、葡萄の収穫の季節だったのだろうが、ミレーの落ち穂拾いに描かれているようなおばさん達に呼び止められ、葡萄の房を自転車の前籠にいっぱい積んでくれた。

ここでも「メルシー」と答えるのがやっと。葡萄を食べながら3時間ほど走った所で少し顔が火照って来た。葡萄は腹の中でも発酵することを身を持って経験した。それから少し走った所で休むことにした。酔っぱらったのだ。

道の端で横になると寝てしまった。夢を見た。

(2年前に他界した母が西洋の青く錆びた門の前で手を合わせている。その傍で祖母が母に向かって「増哉は満州に行くつもりだから止めた方が良い」と言っている。息子を戦争で亡くした祖母にとって外国といえば戦地なのだろう。

続いて、船で知り合った人達が出てきた。フランス語を一生懸命教えてくれたデンマーク人のニーチェ。日本語もしゃべる可愛い7歳の女の子だった。デンマーク語は勿論のこと、ドイツ語、フランス語も話せるのだ。フランス語のアールの発音で、この小さな先生の厳しい教えのもと、喉を傷めた僕は勉強そつちのけでニーチェとプールで遊んだりしている。夢から覚めた時、午後5時を回っていた。

アヴィニオンまであと20km、1時間ち

よつとで着く予定である。アヴィニオンに着いた時、食材も売っている小さな雑貨店でパンとソーセージとミルクを買った。



(船の中で描いたニーチェちゃん)

「デュパン・エ・ソーシス・エ・デュレ・シルヴ・プレ」僕のフランス語が優しそうな白髪のおばあさんに通じた時は本当に嬉しかった。「コンビアン？」（いくらですか？）彼女の答えは「デュッサン・トラント・フラン」（230フラン）、聞き間違いだと思ひ、紙に書いてくれるように手振りで頼んだ。

数字が書かれた紙を見た時、老婆が魔法

使いに思えた。紙には（230フラン）と書かれていた。日本円で1フラン76円の時である。

1万7千4百八十円。当時の公務員の初任給より高い。そんな馬鹿な、と思い悩んでいると、おばあさんが口を手をやり「パルドン」（ごめんなさい）と言って2と3の間にコンマを付けてくれた。

デノミされていたが、おばあさんは旧フランスのまま使っていたのだ。2・3フラン、日本円で175円、それでも高いと思った。今の値段にすると、千円位になると思う。

終戦からまだ20年しか経っておらず、日本経済はこの頃発展途上国だったのだ。

歌でも有名なアヴィニオンの橋の向い側にあるユースホステルを利用することにしていたので、

「アヴィニオンの橋の上で輪になって踊ろう、輪になって踊ろう」と口ずさみながら走った。

船の中で知り合いになったギーさん達にユースホステルの会員になることを勧められ、横浜で下船した時に会員になっていたのだが、節約の為よほどのことが無い限り利用しないと決めてはいたものの、早速使

ってしまった。

ユースホステルに着いた時、管理人のおじさんに「部屋を使うかテントにするか？」と聞かれたので「自分のテントにします」と答えた。勿論、スムーズに会話が出来た訳では無く、ジェスチャーと筆談を交えてやっと通じると言った具合だ。

部屋でベッドを使うと2・7フラン、テントを借りると2フラン、自分のテントだと1フランだったように思う。

管理人のおじさんは僕のパスポートを見て日本人だと知り、無料でテントを張らせてくれた。以前、日本人が来た時のことを管理人が話してくれたようだが、ほとんど理解出来なかった。その日本人が凄く良い印象を与えたことだけは確かだ。

テントを張り終えた頃、ユースに泊まっていたドイツ人二人の男性が手招きしてベランダに来るよう誘ってくれた。机の上には手作りの将棋盤と駒が置いてあった。おそらく例の日本人が作ったのだろう。僕の語学力では将棋の指し方を教えることなど出来る筈もない。ドイツ人は残念がってはいたが直ぐに話せない僕を氣遣ってくれ、簡単な別の話を始めたのである。彼等はミ

ユンヘンの学生で、バカンスを利用して毎年自転車で旅行に出ているらしく、今年は南仏にしたそう。来年はイタリア一周を考えていると話していた。

ドイツの学生は大抵見聞を広める為、バカンスを利用して旅に出るそう。

ヨーロッパでは昔から学生はヒッチハイクや自転車を使ってお金を使わないで旅をするのが習慣らしい。ヒッチハイカーを乗せる車の人も昔、同じ経験をしているので快く車に乗せると言う訳だ。彼等とは自転車を通じて同じ仲間になった気持ちになり、少し気持ちに余裕が出来たように思った。会話も誤解しながらではあるが上達したように感じた。おそらく厚かましくなっただけなのかも知れない。

翌朝、管理人さんとドイツ人の学生達に「ボンボヤージュ」（良い旅を）と簡単な挨拶を交わして別れた。二度と会うことも無いだろうに、何時も会っている友人のように…。

計画通り午前中は美術館などを見学することになっているのでアヴィニヨンの美術館に向かった。

美術館と教会を見た後、広場でサンドイッチとミルクで昼食を済ませ、昼過ぎにアルルに向けてペダルを踏んだ。

アルルから西の方向にあるモンペリエに進路を変え、アルルとモンペリエの中間辺りでテントを張ることにした。

このところ快晴の日が続いている。

夕食は昼前に多めに買っておいいた何時ものパンとソーセージとミルクで済ませ、テントの中で日記を付けながら眠ってしまった。夢を見ることもなく、良く眠れた。

爽快な気分で目を覚ました僕は、モンペリエの街を素通りし、夜は海辺のセートのユースホステルを利用することにした。

人の出会いはやはり楽しい。

ユースに着いた時、イタリア人が「チャヤオ」と大声を上げながら近づいて来た。一度も会ったこともないのに、この親しさはどこから来るのだろうか？イタリア人がいっぺんに好きになってしまった。

「チャヤオ・コメスタイ」（やー、元気かい）と言いながらテントを張るのを手伝ってくれた。「アイム・ファイン・サンキュー」と、英語で答えながらイタリア語が話

せるようになりたいと思った。

「テュ・セイ・ジャポネーゼ」（君、日本人？）と聞いて来たので、「イエース」と答えた。

日本人が珍しいのか、イタリア人は友達を連れて来て二人して僕を犬か猫でも見るようにじっと見つめたり、頭を撫でたり、腕を軽くたたいたりした。そして、僕の手を取って大部屋に連れて来た二人は、テーブルの上に3枚の皿を置き、スパゲッティを盛り付け一緒に食べようと言ってくれた。パンとソーセージとミルクだけの食事だった僕にはスパゲッティがご馳走に思えた。本当に美味しかった。

隣の机にはフランス人、ドイツ人も食事をしていた。彼等とも色々話をした。単語を並べただけだったが、皆と同じ時に笑うことも出来た。

翌朝、次の予定地ナルボンヌに向かって走り出した時、フランス人が「ボンボヤージュ」（良い旅を）と言ひ、続いてイタリア人は「チャヤオ・アリヴェデルチ」（じゃあな、また会おう）、ドイツ人は英語で「ビーケアフル」（気を付けて）と言って

それぞれ車で通り過ぎて行った。

その時は感じなかったが、後に振り返ってみると国民性がそれぞれ表れているように思えた。

勿論、早合点はしない方が良い。

リュックサックに日本の旗を付けると良いとギーさん達に言われていたので、そのようにしたお陰でいろんな人達が声を掛けてくれた。

一台の車が止まった。アメリカ人のご主人と日本人の奥さん、ジェフと言う名前の5歳くらいの男の子、奥さんの弟さんとで旅行中とのことだった。

レストランでご馳走になった。食事をしながら、奥さんがいろいろ話して下さった。「気負わずに、ただパリの水を飲んだ。それだけで良い」この言葉が脳裏に残り、後々まで考えさせられた。

ナルボンヌで一泊した後、朝のうちに美術館と教会を見て、カルカソンヌに向かった。カルカソンヌの城壁の中にユースホステルがあったので利用することにした。雨に見舞われたからである。

10月頃からフランスは雨期に入ると旅行誌などで調べて知ってはいたが、この調子だとこれから大変かも知れないと気を引き締め直して、カルカソンヌからトゥールーズまで雨の中を走った。



(カルカソンヌの城壁)

雨合羽を着ていたが身体の中は汗で生温かく、空気に触れている外側は冷たく濡れていて気持ちが悪かった。そのうち小降りになり、やがて晴れ間も見えて来た。途中、農家の横を通りかかった時、子供たちのけ

たたましい声が聞こえてきた。

自転車を止め農家の庭を見た時、犯罪現場に出くわしたかと思った。

5、6才の男の子が両手で兔の耳を持ち、10歳位の女の子が包丁のようなもので兔の皮を剥いているところだったのだ。

きつと私達が魚を料理するのと同じ感覚なのだろうか。しかし、その光景を見続けることは流石に出来なかった。

トゥールーズの近くでデントを張った。

朝早く街を訪れ、何時ものように午前中は美術館、教会などを回り、何時ものように食品なども売っている雑貨店で飽きもせず同じパン、ミルクとソーセージを買い、広場のベンチで昼食を済ませた。

トゥールーズからゴヤの美術館があるカストルに行き、そこでデントを張り、次の日はロートレックの故郷であるアルビを訪れた。

アルビの美術館に行く途中、教会の横の市場を通った。

豚の頭部だけ並べてあったり、牛の頭、心臓、腎臓などもあった。羊の脳味噌の鮮度が分かるように頭が真っ二つに割られて

いた。

良く食べられているので、こうして売られているのだ。今まで、日本に居る時このような光景を見たことがなかったのでカルチャーショックを受けた。しかし、慣れは怖いもので後にパリで生活するようになった時、羊の脳味噌は僕の好物になっていた。ちよつと生臭い揚げた豆腐のようであり、牡蠣のようでもあった。

美術館には、ロートレックの少年時代からの作品や、彼の幼少期に使っていた揺り籠や玩具、日用品などがあった。彼は貴族の生まれで、家系図なども陳列されていた。画集などで知られている彼の画風に至るまでは写真でアカデミックな作品だった。

感覚は勿論大切だが、やはり基礎のデッサンはしっかり身に着けなければならぬと思った。

小雨の中、アルビの郊外で、テントを張った。

アングルの美術館があるモンターバン行き彼のデッサンの素晴らしさを堪能した。写すだけではなく、アングルと解るデッサ

ンであった。

モンターバンから南のオーシュ、更に南のタルブに向かった。そして、とんでもないハプニングに遭遇したのである。

遅くまで走った為、視界が悪く足を良く確認せず、薄暗い中テントを張った。

草原が広がっていてテントを張るのに非常に良い場所だと思ったのだ。

寝袋に包まり、道中での経験したことなど想い出しながら日記を付けて眠りに着いた。

朝早く(ゴソゴソ)という物音で目が覚めた。耳をそばだてて身構えた。

テントが揺れた。恐ろしかった。

そつと小窓のフラスナーを下げて見てさらに驚いた。目の前に大きな牛の顔があったのだ。

アルビの市場で並べられていた牛の頭とダブって見えた。この場所は広い牧場の中で昨日の夕方、牛たちが牛舎に帰された後、テントを張ったのだ。

朝の露でテントと敷物は濡れて、牛の糞と泥で汚れてしまった。



男の人が近づいてきて水の出るポンプの場所をジェスチャーで教えてくれたので、男の人に礼を言い、テントや敷物、自転車などを洗った。久しぶりに髭を剃り、気分新たに出来る事が出来た。

遠くうつすらと見えるピレネー山脈を左に見ながらタルブからポーに向けて走った。

ポーでは船で知り合いになったパトリックさんの家でお世話になった。

彼のお父さんは歯医者さんで早速歯を見て貰うことになった。と、言うのも、フランスパンの固さに僕の歯は耐えきれず欠け

ていて、痛み始めていたのだ。歯は「抜いた方が良い」と言われ、抜いて貰った。人の親切に慣れてしまっていた僕は「メルシー・ボーケー」、と簡単な一言で済ませてしまったことを今も後悔している。

もう1日、泊まるように勧められたがこれ以上の親切は心苦しく思われ、先を急ぐことにした。パトリック家の人達の表情は、抜歯した後のことなど心配され、又、雨の中僕を引き止められなかったもどかしさや戸惑いが見てとれた。

ポーからは雨の中、バイヨンヌまで走った。

バイヨンヌの美術館にダヴィンチのデッサンがあった。美術誌で良く見て知っていたが、思ったより小さいのには驚いた。

バイヨンヌからボルドーまでは真っ直ぐで単調な道が150kmも続いていた。二日間の行程だ。

途中ユースホステルは無く、雨の中テントを張った。

ボルドーの美術館には数多く有名な画家の絵があった。ドラクロワの(獅子狩り)も見た。しかし、感激しなかった。

これまでに沢山の絵を見過ぎたからなのだろう。ヴェラスケス、ルーベンス、レンブラントの絵に圧倒されたからかも知れない。

ボルドーから北のアングレームの街に入ったのは、夕方暗くなってからであった。次の日の朝、霧の中に浮かぶ街の風景は、今でも忘れられないほど幻想的で美しかった。まるで水墨画のようだった。

ヨーロッパの絵画に濃霧に浮かぶ、とか霞がかかったような風景はあまり描かれていないのはどうしてだろう。アジア人とヨーロッパ人の感覚の違いなのだろうか。

小雨の中テントを張る日が続いた。ポワティエ、そして、ロワール河のツールの街に着いたのが10月15日頃だったと思う。

ツールではユースホステルを使った。ユースでは大抵数人の学生達が泊まっていたがバカンスが終わったのか、その日は訳あり気な出稼ぎ老人と僕とふたりだけだった。

夕食を済ませ、湯の出ないシャワーを使い、震えながら日記を書き、明日からの予

定を再確認し床に着いた。

自転車の旅が辛くなりツールからパリに向って北上したかったが、船で知り合いになった人の所に寄らなければ彼等に心配を掛けることになるのではないかと思い、予定通りに走った。

ロワール河の城には特に、惹かれることはなかったが、アゼ・ル・リド城、シャンポール城、シュノンソー城と回っている内に、興味を持つようになって来た。



(シュノンソー城)

城の見える河原でテントを張っている人達がいたので僕も張ることにした。

「ヴーゼット・シノワ？」（あなた、中国人ですか）、「ヴェトナミアン？」（ヴェトナム人ですか）と数人話し掛けてきたので、「ジュスイ・ジャポネ」（日本人です）と答えた。リュックサックに国旗を付け、日本人であることを示すことの大切さが身に染みて分かった時だった。

アンジェの街では、ギーさんのお兄さんの世話になることになっていた。

ギーさんから「手紙や電話などで前もって連絡しなくても良いから」と、言われていたので連絡せずに突然お伺いしたのだ。

お兄さんもボツボツ見える頃だと思っておられたようで、快く迎えて下さった。ギーさんの姪のフランソワーズちゃんは6才くらい。

キヤラメルの子にプリントされているフランスの女の子に似ていて、ルノワールの絵のようにフランス人特有の目、鼻、口などの陰がグラデーションで柔らかな顔立ちをしていた。

ギーさんのお兄さんの家で夕食をご馳走になった。トマトの中にミンチ肉などが入ったオープン料理は今までに食べたことがなかった。美味しかった。今でもその味を思い出すことができる。

アンジェからツールに戻り、パリに向かってても良かったのだが、西のナントに行く予定にしていた。多分、美術館にドラクロワの作品があったからだと思い込んでいる。ナントまで90km、西からの向かい風に悩まされながら、どんよりとした空気の中、帰りは追い風になると期待しながら走った。ナントに着いた時は暗かったのでユースホステルに泊まることにした。

午前中、何時も通り美術館など見学し、昼からロワール河沿いにナントからツールに舞い戻って来た。そしてテントを張った。

小雨の中、オルレアンに着いた時は上着もズボンもずぶ濡れで重たかった。ズボンを膝の上のあたりで切って短パンにしたのでペダルを踏む足は随分軽くなったが、冷たかった。

ジャンヌダルクで有名なオルレアンの街

には至る所に彼女の銅像や石像などがあつた。

テントを張る元気もなく、ユースホステルを利用することにした。衣類の洗濯とか濡れたテントや敷物などを乾かしたりすること、また、身体を休め、気持ちを新たにすする為にも2泊は必要だった。何時もどおりのパンとソーセージではなく別の物をと考えたが、チーズはワインが要る、余分な出費になるので無理だ。デメリットのことを思うと、やはり、ミルクとソーセージで十分だ。

オルレアンからシャルトルに向かって出発したのが10月20日の朝。初心に帰り気分上々であったが、それとは裏腹に天気はどんよりとした雨模様で暗かった。身体の中は汗で生温かく外側は冷たく気持ち悪いのには慣れて来て、鈍感になってはいたが、寒さには慣れなかった。

パリまで3日で行ける距離になり、胸躍る思いだった。シャルトルに着いた時、雨が止んで雲の間から光が差しして来た。美術書に出てくる風景画そのまま、ミレーの（春）が浮かんだ。

シャルトルの大聖堂はステンドグラスが有名で、運良く光が教会の中を照らし、荘厳な気持ちにさせられた。

その日もまた、何時雨が降るかも知れないのでユースホステルに泊まることにした。

翌朝は久しぶりに天候に恵まれた秋晴れの日であった。ヴェルサイユに向けペダルを踏んだ。

途中、ランヴィエ近くでポリスに止められ「この先は高速道路建設中の為、危険なのもっと小さな公道を走るように」と注意された。僕の地図には小さな公道までは記されていないかった。

タラップの街の近く、エルガルと言う小さな村にユースホステルがあると案内書に書いてあったので、道行く人に尋ねながら進んだ。

しかし、思うようには行かなかった。ほとんど森の中に迷い込んでしまいさまたようこと2時間、道を尋ねる人も見つからず焦った。

舗装されていない道に入ってしまった。少し広い場所に来た時、目の前の美しさを目を見はった。木々の間から差し込んだ光が、紅葉樹の葉っぱを黄金色に照らし出

していた。

日本の紅葉と違い、鮮やかな赤色は無いが暖色系の色立体のようだった。そこで、テントを張ることに異存は、まったくない。

次の朝、雨の音と寒さで目を覚ました僕は、水筒の水で簡単な洗顔を済ませ、兎に角、大きな公道に出なくてはと思い、北の方角に向かって走った。

公道に出たが雨天の空は太陽の位置が分からず、南の方に向かっていないのではないかと心配になっていた時に一台の車が止まった。

男の人が車から降りて来て、「エスク・ヴーゼット・ジャポネ？ ヴー・シエルシエ・オベルジュ・ドウ・ジュネス？」（あなた日本人ですか？ ユースホステルを探していますか？）、僕は「ウイ」（はい）と答えた。その人は地図を書いて教えてくれた。

昼過ぎに、エルガルのユースに着いた時のことは50年近く経った今でも忘れることが出来ない。

管理人のジャック夫妻の優しかったこと。

パスポートとユースのカードを渡しながら

「3、4日お願い出来ますか？」と訊いた。規則でシーズン中は2泊迄だったので断られると思ったが、ジャックさんは温めた砂糖入りのワインを寒さと疲れで震えている僕に勧めながら、「ウイ・ウイ」と答えて下さった。（オフシーズンだし、そう固いことを言うな、何日でも泊まって行け）と

顔に書いてあった、と勝手に解釈した。ジャックさんの傍にはゾルバと言う名の犬が纏わりついていた。

「ゾルバ・クーシェ・イシ」（ゾルバ、ここに座れ）。しかし、ゾルバは一向に言うことを聞く気配はなく、ジャックさんもとつくに諦めていて、ただ「ゾルバ・クーシェ・イシ」が口癖のようになっていただけだった。

夕方、僕と同世代の人達がグループでやって来た。俳優の岡田真澄の兄エリックに似たアラン。映画俳優ジャンポール・ベルモンドに似たジョン・ルック、ダヴィッドの作品「マラーの死」に似ているマルク。青白い顔に眉間に皺をよせたセルジュは、革命の首謀者ロベスピエール。

アメリカの俳優ポール・ニューマンにち

よつとだけ似たスイス人のヴォルテル、それぞれ彼女と同伴であった。



(左からセルジユ、筆者、マルク、右下  
ジョン・ルック、右上ジャンとキセラ)

歴史上の人物が登場して来たのでフランスに来る前、日本で読んだ本を思い出した。スタンダールの『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルに似た人を探すのも面白いかも知れないと思った。

ナポレオンより革命児サン・ジユストの方に僕は共感していた。彼等に似た人も

民衆から愛されていたダントンの顔も探してみたい、彼は人心を掴む才能があった。醜男であったが愛嬌があったらしい。

ドラクロワは革命時の狸と称されたタレイランの児と云われている。ドラクロワがナポレオンの絵を依頼されなかったのは、母方に王党派と関係があったのかも知れない。歴史の話は次の機会にしないと、どんな調子に乗って横道に逸れてしまいそうなので止めておくことにする。

ヴォルテル達は食事の支度を始めた。料理と言っても牛肉を焼いただけだったが、パンとカマンベール(チーズ)とサラダ(レタスとトマト)、それと果物はリンゴ、ポワール(西洋ナシ)など、籠に溢れんばかりに入っていた。勿論、ワインも10数本。

僕も誘われたが、夕食は済ませていたので礼を言いながら断った。しかし、ジョン・ルックがパンにチーズを挟んだサンドイッチを渡してくれ、マルクがワインを勧めてくれた。ワインとチーズが本当に美味しいと感じたのはこの時が初めてだった。食事は雰囲気だけでも変わるものだと、つくづく思った。

その夜は1カ月間の自転車の移動の疲れとワインのお陰でぐっすり眠ることが出来た。

翌朝早く、ジャックさんの「まだ早い」と言うのも聞かず、彼等は僕を起こしに来た。散歩に行こうと誘ってくれたのだ。腹が空いていたが、朝食は散歩の後と言うことだ。

昨日の雨が嘘のように空は青かった。皆の吐く息が白く印象的であった。まだ薄暗い中、外に出て森の中へ入って行った。道はぬかるみ、所々水溜りもあったが彼等は奇声を上げて走ったり、また、静かに話合ったりしながら僕のことなどそっちのけで散歩を楽しんでいた。それが却って僕には嬉しかった。

途中、農家に立ち寄り、朝食用に搾りたての牛乳を分けて貰った。マルクが何時ものことだと、言いながら一杯飲ませてくれた。

産まれて初めて飲む搾りたての牛乳は濃くて温かくて美味しかった、と言いたところだが、僕にはこの味に慣れるのは時間がかかると思った。

ユースに帰り、皆で井ぶりのような大きなサイズのマグカップに温かいカフェオレをなみなみと注ぎ、バターをたっぷり塗ったフランスパンを漬けながらの朝食であった。フランスの一般的な朝食らしい。

彼達の週末は散歩ではなく、10kmの強行軍が習慣であった。もしかして、散歩の意味が日本とフランスでは違うのかも知れない。

「クロサワ・アキラの映画は良いね。でも、私はミズグチ・ケンジの方が好きだな」と、アランが僕に話しかけて来た。優しい声だった。

当時、黒沢明の映画も、溝口健二の名前すら僕は知らなかった。

スイス人のヴォルテルが会話に加わって来た。彼は去年、日本に行ったそうである。そして、アラン達に話し始めた。

「ヒッチハイクは日本ではあまり知られていなかったんだね。ある街でヒッチハイクをしていたら、一台のトラックが止まってくれた。

運転手は心配そうな表情をしながらも私を無理やり座席に座らせ、急発進したんだ。

何処に連れて行かれるか不安だったよ。運転手は何かを探している様子だった。

小さな病院らしい建物の前で車を止め、両手で私にそのまま、と言ったジェスチャーをしながら病院の中へ入って行った。

そのジェスチャーが彼の純粹さを表していたね。無知から来る素朴さとは違うのだよ。分かるかな！

産まれた時からの性格なんだと思ったよ。今まで会った日本人は、だいたい皆このような人達だった。運転手は少し英語が話せる医者連れて来て軽い会釈をして何も言わずに去って行ったよ。サムライだと思ったね」

そして、僕の顔を見て、「バンザイ・ニッポン」多分、こんな会話だったと思う。

後に知ったことだが、アインシュタインが日本人を称して「純粹さを保った奇跡の人類」と言ったそうだ。

夕方、アラン達は帰って行った。パリに行くなら、一緒に車で行くよう誘ってくれたが、帰りのこともあるので、と断った。

「来週もここに来るだろう？」の問い掛けに「まだ、分からないけど、是非来たいで

す」と僕は答えた。

次の朝も晴天に恵まれた。

ジャックさん夫妻に「ボンジュール・ジュヴェ・ア・パリ」（おはようございます、パリに行きます）と話した。ジャックさんは「ボン・ナニヴェルセル」（誕生日、おめでとう）と、僕にバスポートとチョコレートを渡しながら言ってくれた。バスポートを見て誕生日が分かったのだろう。忘れていたので、嬉しかった。10月25日、22歳になった。

「ここに帰って来るのは、多分、明後日になると思います」と言って自転車に乗った。ヴェルサイユに着いたのが朝の8時前、宮殿はまだ開いていなかったたので、又来るつもりでヴェルサイユを後にした。

パリの南、ボン・デ・セーヴル（セーヴル橋）に9時ごろ着き、セーヌ川を北に向かって走った。

セーヌ川を挟んでエッフェル塔の真向かいにあるシャイヨー宮の噴水の前のベンチに座った。

エッフェル塔を眺め、ジャックさんに

ただいたチョコレートを食べながら休んだ。  
今のように観光客でいっぱいと言うことはなく、観光客の姿はほとんどなかった。  
少し上り坂のイエナ通りを北に向かって走った。

エトワール（凱旋門）に着いたのは朝の10時ごろだった。凱旋門の下に立ち、シャンゼリゼ通りから遠くに見えるコンコルド広場のオベリスク、遙か先にルーヴル美術館があるチュイルリー宮殿を見た時、自然と涙が出て来た。

凱旋門の下に立ち、シャンゼリゼ通りから遠くに見えるコンコルド広場のオベリスク、遙か先にルーヴル美術館があるチュイルリー宮殿を見た時、自然と涙が出て来た。嬉しかった。

19歳の時、ヨーロッパの絵画、特にドラクロワを見なければ、と決心した頃を思い出した。

その時から3年近く経ってようやく辿りついたのだ。エトワール（凱旋門）を背にシャンゼリゼ通りを自転車で走るのは爽快であった。



（凱旋門に立つ）

ルーヴル美術館の前で男性が近づいて来て「君を待っていた」と言うのだ。僕は彼を全く知らない。「アヴィニオン辺りで電車の中から日ノ丸を付けた自転車を見て必ずルーヴル美術館に来ると思いました。しかし、あまりにも遅いので諦めかけていました。本当に良かった」と言った。彼は僕があちこち回っていたことを知らなかったのである。

彼の名はフィリップと言う金髪のイギリス

ス人でパリのソルボンヌ大学で法律を学んでいる学生だったように思う。彼は美術館のチケットも買ってくれ、美術館の案内までしてくれた。僕がみずばらしく見えたのだろうか。

ドラクロワの部屋に来た時、「僕はこの画家の絵を見る為だけにやって来た。でも、残念なことに感激しなかった」とフィリップに話した。

しかし、収穫はあった。ダヴィンチ、ラファエロ、ボッティチェッリ、ティツィアーノ、その他、ルネサンスに活躍した芸術家たちの絵を見ることが出来たことである。

レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」の前で数人の人達に学芸員と思われる女性が説明していた。

その傍で、「グワールダ・ジョコンダ・エ・ソミーリア・トゥア・ノンナ・ダ・ヴェーロ？」

（見て、モナリザを。あんたのお祖母さんに似ていない？）イタリア人の女性が友達に話していると、フィリップが通訳をしてくれた。

学芸員が一生懸命高尚な話をしてこのイ

タリア人の妙に説得力のある会話には近づけないと、思った。

彼女達にとつてモナリザは身近な人、なのである。

フィリップも同感だと言った。

彼は絵の鑑賞を2時間も付き合ってくれ、美術館を出た後もパリの街を案内してくれた。

セーヌ川を渡った所にエコール・デ・ボザール（美術学校）があった、中には自由に入ることが出来た。

そこで、船で一緒だった日本人に会うことが出来た。彼はフレスコ画の実習を受けているところだった。彼とはパリで会えるの良いね、と云い合っただけだったので、偶然とは言え、本当に良かった。また会う約束をして彼と別れた。

（2年後この学校に入学し、4年間学んだ）

フィリップが食事をしようと言って学生食堂に連れて行ってくれた。

勿論セルフサービスで安かった。

ビフテキとポテトフライ、レタスのサラダ、ヨーグルトと果物が付いて、パンは欲しいだけ貰える。

合計1・2フランだったと記憶している。日本円で91円、学生が優遇されているのが分かった。

当時ボザールの授業料は年間6千円だったと思う、その6千円も材料費込みなので、実質授業料は無料なのだ。

フィリップのお陰で、素晴らしい最終日を迎えることが出来た。

（丁）

あとがき

ドラクロワの絵を見ることが目的だったのに、ルネサンスの絵画に魅せられてしまいがち目が変わったのは自然かも知れないです。

ドラクロワもダヴィンチ、ミケランジェロ、ティツィアーノの崇拜者なのです。そして、ルネサンスの芸術家達も又、ギリシヤ時代の模倣から出発したと言っても良いくらいです。

ルーヴル美術館への自転車の旅はたくさんの人達との出会いがあったから達成することが出来ました。

もし、マルセイユから直接パリに行っていたら大勢の人達に出会うこともいろいろな出来ごとを経験することもなかった。エトワールで涙を流すほどの感動もなかったと思います。

偶然の連続でしたが必然であったかも知れない、と今は思っています。

日記帳などの入ったスーツケースを失くした為、想い出を紐解きながら忠実に書いてたつもりです。

書いている時に思い出したこともありました。

また、船の中でも色々な出来事や出会いがあったのですが、焦点を自転車の旅に絞りました。

アドレス帳もなかったので、世話になった人達や旅先で出会った人達にお礼の手紙も連絡もしていない自分が恥ずかしくて情けないかぎりです。

この紀行文がお世話になった人達や旅先でお会いした人達の目に触れることがあるかもしれないと思いつつ…。

2014年 12月12日

大阪府 阪南市 尾崎町にて